



「エルニーニョ現象を学ぶ (気象ブックス007)」

佐伯理郎 著

成山堂書店, 2001年1月, 153頁,

定価1,600円(本体価格)

ISBN4-425-55061-7

いまやすっかりポピュラーになったエルニーニョ現象であるが、一般の人にもわかりやすく解説された本は日本語では案外少ない。本書は、気象庁の初代エルニーニョ監視センター所長を勤めた著者による一般向けの解説書である。全100巻をめざす、野心的な「気象ブックス」シリーズの第7巻として2001年1月に刊行された。

同シリーズ刊行の趣旨には、「理科離れ」を引き戻すことも含まれているという。本書のタイトルが「…を学ぶ」となっているのは、「微力ながらその趣旨に沿うよう協力できたら」と述べる著者の意思を表すものであろう。

本書の章立てでは以下のようになっている。

- 第1章 エルニーニョ現象とは
- 第2章 太平洋の海と大気
- 第3章 エルニーニョ現象のメカニズム
- 第4章 エルニーニョ現象を観測・監視する
- 第5章 過去のエルニーニョ現象の特徴
- 第6章 エルニーニョ現象を予測する
- 第7章 エルニーニョ現象と世界・日本の天候
- 第8章 エルニーニョ現象の社会経済的影響
- 第9章 エルニーニョ現象と気候変動
- 第10章 インターネットで見えるエルニーニョ現象の情報

エルニーニョの語源（「神の子」）と定義から入る第1章はオーソドックスであるが、第2章では、ウォーカー循環、混合層、温度躍層、コリオリ力、赤道湧昇など、赤道大気海洋系を理解するのに必要な概念が丁寧に説明される。それをもとに、第3章で、大気海洋結合系の振動現象としてのエルニーニョ現象のメカニズムが解説される。さすがに高校生ではケルビン波、ロスビー波はきついかもしれない。しかし、ちょっと理屈っぽいかなと思わずにこれらの章をじっくり読んでもらいたい。看板に偽りなく若い学徒を念頭に著者が真摯に語ってくれている。「なぜ、赤道に沿って海水温が上がるのか?」、「エルニーニョの後には必ずラ

ニーニャが来るのか?」など素朴な質問を念頭に読むとともっとよい。

第4～8章は一転して現場人たる著者の真骨頂を見せる部分である。とくに、エルニーニョのための海洋観測を解説した第4章には他を凌ぐ分量が与えられている。「気象観測と同様に、海洋の観測……データの一つ一つも気象や気候の予測にとって不可欠なものであるということを、声を大にして訴えたい」という著者の熱情の発露であろう。第5章で海面水温データをもとに過去のエルニーニョの経過を振り返り、第6章は現行の予測手法についての解説になっている。責任ある立場の著者らしく、予測の成功例だけでなく失敗例も挙げ、「まだまだ改良の余地が多く残されている」と結ぶ。

第7章は、一般読者も興味あるところ、日本や世界の天候へのエルニーニョの影響を扱った部分である。PNAやPJテレコネクションパターンにも触れているが、統計的記述中心で、「学ぶ」という観点からは消化不良の感が残る。著者自身がことわっているとおり、全般に記述が海洋に片寄っている傾向は否めないが、この章についてのものたりなさを著者に帰すのは酷。むしろ気象学会の我々が奮起して、次の機会には、なるほどと思える解説を可能にしたいものである。

一方、エルニーニョの社会・経済への影響を色々と紹介する第8章では、現場で部外対応もこなしてきた著者ならではの情報も彩を添えている。

第9章は、「気候変動」とはいつても、十年規模変動や地球温暖化とエルニーニョとの関係は研究の先端トピックで、さすがに本書に紹介されるほどの知見はまとまっていない。この章の内容は、エルニーニョに伴う二酸化炭素変動の話題が主である。

社会的な影響もさることながら、入学試験にも頻出するエルニーニョ現象は、やさしくかみくだいてもらえば高校生程度の知識でもその物理的エッセンスを理解することのできる好教材である。著者の柔らかく丁寧な語り口は、熱心な若い読者にその喜びを与えることだろうし、現場人ならではの情報量はマスコミをはじめとする一般社会人の要求をも満たすものであろう。

本稿は、評者怠慢につき当初の予定から大きく遅延してしましたが、さいわい(?)、今年はエルニーニョ年になりそうである。本書を座右に、第10章で紹介されているインターネットサイトでリアルタイム情報を見ながら生きた学習のできる絶好のチャンスといえよう。(東京大学気候システム研究センター 木本昌秀)